

和 章 平

一九九五年はちょうど「戦後五〇年」があらゆる観点から「総括」された年であった。

時の政権は、あっと驚く、自社さ政権＝村山内閣だったが、特記すべき役割を何も果たさないまま終わり、橋本「本格政権」に引き継がれた。

しかし、橋本政権も一九九八年七月一三日の参院選挙の大敗で崩壊し、日本は今「凡人」総理のショートリリーフの下、未曾有の政治的・経済的混迷期にある。

ところが今、本原稿を書いている一九九八年一〇月、世間は和歌山毒カレー事件、林容疑者夫婦のヒ素問題一色となり、数年前のオウムサリン事件と同じく、「一億総ワイドショー」国家と化している。

まさに「平和ボケ日本」、「観客民主主義」日本の、極みであろう。

*

*

大谷医師は昭和四九年（一九七四）の開業以来、二五年間、医師として患者を診る中で「人間観察」と「社会観察」を続けてきた。私は昭和二四年（一九四九）生まれ。そして大谷医師と同じ昭和四九年（一九七四）の弁護士登録以来、彼と同じく二五年間、弁護士として「人」と「社会」を観察し続けてきた。

*

*

そんな私と茨木市に住む彼との接点は、バブル絶頂期を過ぎた平成二年六月九日、茨木元町再開発問題の相談だった。

茨木元町の再開発問題は古く、昭和五六年一二月の再開発準備組合設立までさかのぼる。準備組合設立以来、再開発の機運は、中曽根アーバンネサンスの展開とともに盛り上がり、デベロッパーの決定、都市計画決定の準備へと進んだ。しかしその反面、地権者の反対も根強く、ついに昭和六四年準備組合は解散した。しかし再度平成二年五月、第二次準備組合が発足。これに異議を唱える大谷医師らは、平成二年六月二四日、私のアドバイスに従って、「元町地区再開発計画を見直す会」を発足させた。

以来六年間、「バブル崩壊による再開発の成立条件の困難化」という、反対派への追い風もあったが、「人の和」を基調としたねばり強い学習と啓蒙活動、そして市当局・準備組合への反対運動の展開により、平成八年、茨木市は元町再開発を白紙撤回するに至った。

*

*

再開発問題についての私の視点と大谷医師の視点。それは、相談を受けた顧問弁護士としての目と、再開発により財産的利害を直接受ける地権者の目という相違があった。

しかし、問題に取り組む姿勢、必要なアピールを書くときの視点などは、何故か不思議なほど一致していた。これは多分、大谷医師の人間・社会観察の目と私のそれとが多くの共通点を有していたためであろう。

私は、ここでの六年間にわたる顧問弁護士としての活動は、一方的に法的知識や運動展開のノウハウを授けたのではなく、逆に彼から多くのものを学んだと考えている。

*

*

大谷医師の「想い」は、本業の心・技・体のコントロール法・呼吸法から、教育・文化論はもとより、政治・経済論へ、そしてまた人間の「しあわせ」論まで巾広く広がっている。

これは彼が、医者という専門職の「技術」の対象として患者を診るのではなく、「人間として」患者を診る中で、人間と社会のあり方を悩み、考えていたことを端的に証拠づけるものである。

私が思うに、彼は喋るのは得意ではない。多少どもりがちなあの話し方を見ていると、はっきり「下手」といってもよいだろう。

しかし多分、そのしゃべり下手な分だけ、彼の「思考」は広がり、深まっているのではないだろうか。そして彼は書くことが好きである。従って彼にとっては、患者を診、社会を考える中で彼の頭の中に浮かんでくるさまざまな想いを、ワープロに向かって打ち出す作業は、何よりもハッピーな時間だと思う。

*

*

本冊子における、①「思考さまざま論」、②「人間観察」論、③日本の「失敗」論、に大別された診察室からの小文（コラム）は、彼の想い・分析・視点を率直に綴った珠玉の数々である。もちろん彼の意見や彼の分析に同調する必要はない。反論してやろうと思うことは大いに結構だし、彼も大いに歓迎するだろう。

本冊子は、ある時はある部分を気楽な読みものとして、またある時はある部分を真剣な考察の対象として、診察室を訪れた患者の方々や、また親しい友人達が、「人間・大谷峯久」を考えるのにまことにふさわしい内容となっている。

大谷医師と六年間にわたって再開発問題を闘った「戦友」として、また彼と同じく二五年間、人間と社会観察を続けてきた「異業種の専門家」として、本冊子の完成を喜ぶたい。

平成一〇年（一九九八）一〇月一二日

以 上